

『悪屋夢～NOON MAKER～』 - 笹川佐奈

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

気が付けば私はどこかの部屋にいた。周りを見渡せば勉強机や少し小さめのテレビが置かれており、壁にはどこかの学校の制服が掛けられている。ここは誰の部屋だろう……。いや何故だか解る。ここは私の部屋だ。

この変な感覚は何だろう……。私はこの部屋を見たことないのに、自分がそこにいることが当たり前のような感じがする。

それどころか自分自身が誰なのかということから今日の日付という細かいことまで解かる。私は十四歳で、ここから歩いて十五分の中学校に通っている。

でも私はそれとは別の、全く違う人生を歩んでいた記憶を持っている。むしろそちらの記憶の私の方が本当の私という気がする。

覚えている限りでは、店の休憩室であいつと別れて……。そうだ、今日は平成二十四年五月二十七日。別れの日の二年前だ。つまり交通事故があった日の三年後……。ということは、あいつはまだ……。

とにかくここを出てみよう。

ドアを開け、一階へと続く階段を降りて更にドアを開ける。その先にあったのはカウンターやテーブルが並ぶ何かの店のような場所だった。

カウンターの上には丸いポットの上にミキサーを乗せたような機械が幾つか並び、更にカウンターの内側にはコーヒーカップが綺麗に置かれている。一方各テーブルの上には「メニュー」と書かれた冊子と紙ナプキン、そして数種類の調味料が置かれている。そうだ、私の部屋の下は喫茶店になっているんだ。

でも客は一人もいない。それどころか店内に置かれている全ての物は見るからに新品で、まだ使われた形跡がない。それもそのはず、まだこの店は出来て間もなく、開店すらしていないからだ。

でも間違いない、もう一つの記憶でもこの店を知っている。ここは……。

私は急いで入ってきたドアとは別の、『PRIVATE』という札が貼られたドアを開けた。そこは二人用のソファとテレビが置かれてある部屋だった。思った通りだ。この部屋は従業員用の休憩室だ。

まるで完成間近のパズルのように私の頭の中でどんどん記憶が整理されていく。そっか、私は生まれ変わったんだ……。何故かあいつと別れた日の二年前だけだ……。

ということは、この状況が現実なら、私はもう一度あいつに会える！それが解った途端、私の目から涙が溢れてきた。もう一度、会えるんだ……。今度はちゃんと生きている状態で……！

それじゃあ私がこれからやるべきことって……。

だんだん私がこれからするべきことが解っていく。

本当にもう、あいつは世話が焼けるんだから。

長い二年間になりそうね。

◆ ◆ ◆

「……きて……。……なさい！ 起きなさいってば！」

朝の目覚めとは本当に辛いものだ。心地よい時間を現実へと引き戻すあのうるさい『音』は、一種の嫌がらせとでも言えるのではないだろうか。

まあ、なんにせよその『音』を生み出すものがそこらで売っている目覚まし時計ならまだいい。ボタンを一押しするだけであの甲高い音はすぐ鳴りやむし、そうでなくてもある程度時間が経てば自動で止まるからだ。でも僕の場合、毎朝の覚醒を促すものはそんな生易しいものではない。単刀直入に言うと、幼馴染の女の子だ。

これだけだと、羨ましいだの、ギャルゲー乙だの、とりあえず爆発しろと言われかねないが、少し待ってほしい。その幼馴染がもうこの世にはいない人間といったらどう

だろう。解かり易く言えば、幽霊となって化けて出てきた幼馴染が、毎朝僕が起きるまで耳の傍らで大声を出してくるのだ。

もちろん途中で諦めるとか、そういう妥協は一切していただけない。しかも二度寝まで防いでくれるという親切サービス付き。もう涙が出るね。それでもまだ羨ましいと言えるお方がいらっしゃるのなら、ぜひとも代わってもらいたい。

いずれにせよここで抵抗しても仕方ない。いっそ思い切って起きてやることにする。

「やっと起きたわね。ほら、早く着替えて」

「……お前は僕のオカンか何かか？」

「お母さんどころか、幼馴染にまで起こされているようじゃ、あんたの将来が不安で仕方ないわよ」

そんな言い合いをしながらも彼女は浮遊しながら壁をすり抜け、廊下に出て行った。僕はというと、幽霊にまで将来を心配される筋合いはないと思いつつも、さっさと制服に着替え、支度を済ませて三十分後には一緒に家を出て登校した。

自慢じゃないが、僕には友人がいない。もちろん、幽霊が取り憑いていて、あいつから常に監視されているから他の人間と話し辛いっていうのもあるけど、何より僕の体質が一番の原因だろう。

まあ、こんな陰気くさい話をしても盛り上がらないだろう。とりあえずさっさと教室に向かうことにする。そうして二階へ上がる階段に差し掛かった時だ。

「ねえねえ、放課後に行ってみたい場所があるんだけどさあ、一緒に行かない？」

幼馴染がそんなことを言うから僕は他の生徒に聞こえないくらいに声を潜め、極力見ないようにしながら横で浮いている彼女に話す。

「言っておくが、いかにも女の子が嬉々として行くような店とかなら、絶対行かぬえからな。いい加減、他人にはおま……え……」

そこから先の自分の言葉を言い切ることは出来なかった。不意にとつもない眠気が僕を襲ったからだ。

「そう奏た多？」

その様子をあいつは気付いたみたいだが、もう遅い。僕は他の生徒が往来する踊場で、体に力が入らず倒れてしまった。

もちろん演技などではない。そしてそのまま、僕の意識は薄れていった。

◆ ◆ ◆

「おい……嘘、だろ……？ 目を開けるよ！ まう真羽！」

ベッドに横たわる少女を僕は必死に何度も揺するが、一見するとただ眠っている彼女は、目を覚ますことはなかった。

まただ……。またこの夢だ。もう五年前のあの日以来、何度この悪夢を見たかは解らない。発症すると毎度こうやって、それまで兄妹のように育ってきた幼馴染、いぐち井口まう真羽が交通事故で死んだ日のことを嫌でも見るはめになる。

僕はその度に、心の奥からこみ上げてくるとつもない悲しみに抗い切れず、感情を思い切り表に出して真羽が眠るベッドにすが縋り付いて泣いた。

実は現実の記憶ではここから先のことを覚えていない。あまりのショックに錯乱してしまったらしい。しかし、夢の中ではその続きを見ることが出来る。

ただ、始めに言っておくと、思い出したくもないものを見せられて当時と同様途中で錯乱してしまうのか、夢の中とはいえその続きの場面ではいつも初見の様に振る舞ってしまうが……。

ベッドに縋り付く僕の肩を、後ろから誰かがそっと抱きしめてきた。何一つ不自然な動作ではなく、そうすることが当たり前かのように。そして僕を抱きしめている人物が言った。

「ごめんね、奏多……もう大丈夫だから、そんなに泣かないで」

その声を聞いて、僕は驚きながら頭を振り向かせる。それは、まるで優しく包み込ん

でくれるような、慈愛に満ちた表情をしている真羽だった。

「真羽！ 本当に真羽なのか？ これはどういう……？」

ベッドに横たわる真羽と突然現れたもう一人の真羽に混乱しつつも、それまで絶望と悲しみが広がっていた心に、暗闇に一筋の光が差すように少しばかりの希望と安堵が生まれる。

「うん、私だよ。真羽だよ。お願い、早く目を覚まして……」

その言葉を聞いた途端、夢の中であるのにも関わらず、有り得ないような眠気に僕は襲われた。でもその時の僕にとって、それはむしろありがたいことだった。眠ることでもうこれ以上辛い夢を見なくて済むからだ。

「——」

言おうとした言葉をはっきり口に出せないまま、僕は眠気に飲み込まれていった。

◆ ◆ ◆

「……うた！ ……かりして！ ねえ！ 奏多！」

「……！」

その声で僕の意識が戻る。どうやら、またやってしまったみたいだ……。

「ねえ……大丈夫……？」

「あ、ああ……。ごめん、また迷惑掛けてしまったみたいでさ」

「もう！ しっかりしなさいよね！ いきなり倒れられる身にもなってみなさいよ！」

「はは、わりいって」

謝りながら、もう何度運びこまれたか解らない、寝慣れた保健室のベッドから起きる。

あまりこんな言い方はしたくないが、真羽が死んだ日に僕が心に受けた傷は、多分僕が死ぬまでの間で負うであろうものの中で、一番辛いものだと思う。

今でも思い出せるが、それから一年くらいはまともに誰かと話すことすら出来なかった。あいつの死は、僕にとってそれ程のものだったと断言出来る。とにもかくにもそのショックのせいで、僕は二つの体質を得てしまった。

一つ目は、お察しの通り日中に突然耐え難い眠気が襲ってくる病気だ。最近は少しずつ知れ渡るようになってきたが、一応病名を紹介するならば、ナルコレプシーだ。

実際に発症してみても解ったが、これが原因で眠ってしまった場合、見る夢は必ず悪夢なのだ。それで僕の場合はあいつが死ぬ夢という訳だ。

自分の意思で普通に寝る時は悪夢を見ずに済むっていうのがまだ幸いだが……。

ちなみに僕のナルコレプシーはどうやら普通のそれと違い特異なものらしく、一般的にナルコレプシー患者に処方される、モダフィニルのような眠気を抑える薬が一切効かないのだ。これには僕の担当医もかなり頭を悩ませているみたいだ。

ただ、悪いことばかりではなく、カタプレクシーと呼ばれる、感情の高ぶりによって引き起こされる筋力の脱力発作は起こらないという特徴もある。こちらはナルコレプシーとは違い、体に力が入らなくても意識ははっきりしているらしいのだが、どういふか訳か今までそんな発作は起こっていない。

そして二つ目はまあ、これに関してはもう説明不要だろうが、靈感だ。

確か真羽が見えるようになったのはナルコレプシーが最初に発症してからしばらく経ったあとだった。無論、僕に取り憑いている彼女の幽霊は、僕以外の人間には見えない。だからこそ周囲から不審に思われないようかなり気を使わなければならない。虚空を見ながら独り言を呟っていたら、どう言い繕っても不審者にしか思われないだろうし。

ついでに言うておくと、真羽には物理的干渉力もない。だからポルターガイストみたいなことも出来なければ、僕に触れることも出来ないのだ。仮にそれが可能だったら、いろんな意味でとんでもなく恐ろしい目に遭わされていたに違いない。ああ恐ろしや。本当にそんな力がなくて幸いだった。

いずれにせよいくら声を潜めてもたまには他人に聞こえてしまうことや、挙動不審に

なってしまうこともある。

いつどこでぶっ倒れるか解からない面倒くさい持病があることに加えて、こんな怪しいことをしているようじゃ、そりゃあ友人なんて出来ないってもんだ。僕でもそんな奴ははっきり言って遠慮したいね。

現実にはアニメやゲームみたいに甘くはない。これが僕に友人がいない最大の理由だ。ちなみにそれは体質のせいではなくて、あんたのその捻くれた性格に問題があるんだろという方々もいらっしゃると思うが、では逆にこんな体質を得てしまっても、まともな性格を保っていられるのかと問いただしたい。弁解する訳ではないが、結局のところ体質が元凶なのは間違いないのだ。

「でもほんと、奏多も大変よね。私だったら、あんな夢を一回でも見た時点で心が壊れちゃうと思うよ……」

「さすがにそれは大袈裟だよ。でも確かに真羽が出てきてくれなかったら僕も精神的に参っていたらうね。だから真羽には本当に感謝しているんだ。むしろ毎回初めて出会ったような態度になってしまってこっちが申し訳ないくらいだね」

幸か不幸か、夢の中で起こったことは現実では鮮明に覚えている。つまり夢の中での僕は、錯乱のこともあって記憶がなくなってしまうているが、現実ではその事実も含めてちゃんと思い出すことが出来るのだ。何ともややこしくて申し訳ない。

そして例の、真羽が現れる夢の続き——あんなことが現実に起こっていたら、言うまでもなく僕は覚えているはずだ。つまりこのシーンは現実に起こったことではない夢の中限定のものなのだ。

救いなのはそれが悲しみを少しでも和らげ、悪夢から解放してくれることだ。真羽が見えるようになってしばらくして解かったことだが、驚いたことにそれはどうやら現実で幽霊の真羽が見せてくれているものらしい。

言い換えれば、彼女が悪夢を見る苦痛を軽減してくれているのだが、それが判明したきっかけは、ある時悪夢から覚めてふと真羽に「もしかして、夢の中に現れる真羽は、お前なのか？」と訊ねたことだった。

というのも、冷静に考えると夢で見る真羽が当時より少し成長した感じだったからだ。真羽はどういう訳かすごく申し訳なさそうにしてしばらく言おうか言まいかと迷ったような表情をしたあと、「うん」とだけ答えた。

何故夢に介入して続きを見せることが出来るかまではさすがに解らない。だから、その理由は真羽が幽霊だから夢に介入出来るのだ、とあまり難しく考えないようにしている。解ったところで何か変わる訳ではないし。ついでに、現実では物理的干渉力がない彼女が夢の中では何故か僕に触れることが出来るという理由もそういうことにしている。夢の中はある意味何でもありの世界なんだから。

ただ、本当に解らないのは、どうして幽霊になってまで僕の前に現れて、わざわざ悪夢のしく辛苦を軽減してくれるかだ。確かに真羽と僕は兄妹のような関係だけど、だからって死んでまでそうしてくれる義理はないと思う。まさか、僕のことが放っておけないとか、そんなお節介な理由じゃないだろうな……。確かに昔からお節介な奴ではあるけど。毎朝わざわざ起こしに来ていただいているように。

とにかく無事に目覚めたことだし、僕は保健室を出て次のコマから授業に出席した。といっても、もう昼過ぎだったけど……。

無事に放課後を迎えることが出来、各教室から生徒が我先にと出て行く。僕もこれ以上学校に居てやる理由はないので、早々に帰路に着くことにする。

校門に差し掛かったところで、僕はあることを思い出した。

「そういえば今朝真羽が言っていた行きたい場所って、どこ？」

「え？ もういいよ、今日は発症しちゃったんだし。また今度行こうよ」

相変わらず出来るだけ不審に思われぬよう努力しながら会話するが、こういう時テレパシーが使えるたらと常々思う。神さんよ、何で靈感のついでに与えてくれなかったんだ、まったく。

「と言われても家に帰っても特にやることなんかないし」

こういう体質だから僕は部活にも入っていない。定期的に行くところといえば、市

立病院で月二回ある検診ぐらいだ。

「じゃあ行く？ ちょっと隠れ家的なカフェなんだけどね。オープンしたのは一、二年前なんだけど、雰囲気すごくいいらしいの！ それにここからそう遠くないし」「先に訊いておくけど、まさか野郎一人だけで入るには場違いなくらいファンシーな店とかじゃないだろうな？」

「心配しなくても違うって」

で、その喫茶店にやって来た訳だが、何しろ隠れ家的と言われていたぐらいだ、いくら事前に真羽が調べていたとはいえ辿り着くのにかなり時間が掛かってしまった。

その店の見た目はちょっと洒落た程度の民家と何ら変わりなく、それが喫茶店だと知らなければ余裕で素通りしてしまいそうだと感じた。看板も目立たない置き方をしているし。これじゃお客なんて来ないのではないだろうか。

ちなみに店名は「マーメイド・アット・ユートピア」というらしい。日本語に訳すと「楽園の人魚」か。なかなかおもしろい名前だし、センスも結構いいと思う。しかし目立たない店構えが災いしてか、店先から見える範囲では中に客がいる様子はない。静かな雰囲気が好きな僕としてはその方がありがたい。さっさと入店することにしよう。

「いらっしゃい。あれ、ひの日野君？」

入店するなりいきなり店員から名前を呼ばれ驚いた。察するにどうやらこの店員は僕のことを知っているらしい。一方僕はその女店員が誰だか解らなかったので、確かめようと彼女を失礼のない程度に観察した。

結果解ったことは、そいつが恐らく普通の人から見れば惚れてしまいそうな優しいスマイルを絶やさぬ奴で、僕好みのポニーテールで、同じ高校の生徒だということだけだ。ワイシャツの襟に刺繍されている校章が見慣れたものだったし。あと第一印象で感じた雰囲気がどこことなく真羽と似ている。

それが解ったところであまり意味はないので、僕は正直に言った。

「えっと……あんた誰だっけ」

意外にもその答えを教えてくれたのは相変わらず横で浮かんでいる真羽だった。

「ほら、ナルナルだよ。沢木君の好きな人！」

真羽は僕と違い、同じクラスの奴をよく観察している。他人からは見えないことをいいことにいろいろ首を突っ込んだりするから、クラスメイトの人物関係にも結構詳しいのだ。

でも真羽さんよ、ナルナルと言われても明らかにニックネームであることしか解らないし、こいつが沢木とかいう奴から好かれているという情報を知ったところでこっちには何の得もないのだが。

「とんだ御挨拶だね、なるせ成瀬だよ」

女店員には真羽の声が聞こえないのでそのままストレートに名乗った。そうだ、確かに成瀬とかいう奴が同じ学年にいた……ような気がする。

僕が失礼な態度をとったことは変わらないし、とにかく謝っておくことにする。

「ごめん、事情が事情であんまり人付き合いが得意じゃないから」

「知っているよ。今まで一緒に話す機会がなかったけど、私はそういうのあんまり気にしないから。とにかく今日は大切なお客さんなんだし、ゆっくりしてってね」

その言葉を成瀬は笑って許してくれた。どうもこいつからは真羽と同じで人の良さそうなオーラを感じる。

幼いころから付き合いがある真羽は別として、そういう奴は僕にとってあまり得意な奴ではない。きっとこの成瀬はリア充に決まっている。

その後、日当たりのいい特等席に案内してくれた成瀬にコーヒーと適当にホットケーキを注文した。

真羽は店の雰囲気が気に入ったらしく、あちこち飛び回っている。

「ここってあんたの家なのか」

真羽を横目で見ながら気になっていたことを訊いてみる。
「そうだよ。いつもこの時間は私一人だけど、この店自体お母さんが趣味で始めてね」
「へえ。じゃあこの店の名前もお母さんがつけたのか？」
「ああ、それは私だよ。喫茶店にぴったりの名前だと思わない？」
「それは、まあ。でも何で人魚なんだ？」
「特に理由なんかないよ。でも強いて言うならば少しお洒落だと思ったからかな」
ふた蓋を開けてみれば単純な理由だった。

コーヒーとホットケーキを出してくれたあとも、僕は二時間くらい長居をしてしまった。家族と真羽以外であそこまで誰かと話し込んだのも久々だった。学校で孤立しがちな僕に気にせず接してくれたし何よりあいつは話すことがうまい。それに二時間も長居していながら追加の注文をしなかったことを見逃してくれた上に、お代を半額にしてくれたこともなかなか出来る奴だと思う。得意ではない奴だと言ったが、前言撤回しておく。変な先入観持ってすいませんでした、成瀬。もっとも、リア充という認識は譲らないけど。



「奏多、最近表情が生き生きしているね。やっぱりナルナルのおかげかな」
下校中にいきなり真羽がそんなことを言ってきたから驚いてしまった。
「え、そんなことはないと思うけど、例えばどこが？」
「何となく、憑き物が取れてすっきりしたような」
僕に取り憑いている幽霊が何を言ってんだか……。
あれから真羽と僕はよく成瀬の店に行くようになったのだが、驚いたことに最初にまた行きたいと言いだしたのは真羽だった。訳を訊くと「ナルナルが何となく気になるのよね」という、僕にとっては理解し難いことを言ったのだ。
店の雰囲気が入ったとかなら解かるが、成瀬が気になるってどういうことだよ……。真羽とは長い付き合いだが、こればかりは今でもどういう意味か理解出来ない。多分何かしら通ずるところでもあったのだろう。
僕としては成瀬の店でナルコレプシーを発症させてしまうととんでもない迷惑を掛けてしまうことになるので、そう何度も行くつもりはなかったのだが、成瀬の人の良さについつい何度も足を運ぶことになったのだ。
幸い今のところ成瀬の店では発症せずに済んでいるが、最悪の事態も考えておかないとな……。
しかし『マーメイド・アット・ユートピア』は本当に居心地がいい場所だ。成瀬は毎回僕と気兼ねなく話してくれるし、失礼だけど店自体が穴場のおかげで客が少ないし。ちなみに今日も成瀬の店に行くことになっている。

いつも通り店のドアを開けると成瀬が出迎えてくれた。そして初来店から変わらず日当たりのいい特等席に案内され、最近お気に入りのブレンドを注文する。この店のブレンドは香りが特によく、冷めても酸味が少ない。
「ねえ、日野君って幼いころよく遊んだ幼馴染とかいたりするのかな」
何気なく成瀬にこんなことを訊ねられたが、最初は適当な他愛もない話かと思った。
「幼馴染？ いたよ。それこそ兄妹のように育った奴がね。でも事故で死んじゃったけど……」
「おっと、ごめんね」
「いいよ。確かにあいつが死んだ時はショックだったけど、今は大分マシになったから」
気にしてはいないと言えば嘘になるが、隠すことでもないし。
「それで、その『きょうだい』っていうのは、姉や妹と書く方の兄妹かな？」
珍しく成瀬が食いついてきたので、僕は少し照れながら答えた。

「そうだよ。本当に活気のある奴でさ。もし生きていたら年相応に彼氏作って、いろんなところに遊びに行ったりしていると思う」

そう言って僕は浮かんでいる真羽を儂げに見る。成瀬には幼馴染のことを思い出して虚空を見ているように映っているだろう。

「でも実際は残念ながら奏多といろんなところに行っているんだけどね」

そこで浮いている幽霊さんは少し黙っていてほしい。

「じゃあ、その死んだ幼馴染ともう一度会えるとしたら、どう思う？」

唐突に成瀬がそんなことを訊いてきたものだから、驚いてしまった。これには何と答えればいいのだろう。既に四六時中一緒にいるからな……。

「え？ それは、どういう意味？」

質問の意図がよく解らなかったので訊き返してみる。

「例えばさ、その幼馴染が生き返ってもう一度会えるとしたら、日野君はどう思うってことかな。もちろん、幽霊という形での再会ではなく」

そう言って成瀬は僕の視線の先を見た。

「！？」

今まで全く気付かなかったが、まさか見えているのか？ 真羽が……。

「そ、それは……」

だめだ。完全に混乱してしまっている。本当に何て答えていいか解らない。下手なことを言うと追及されかねないぞ。

何と言いつつ迷っていると、来やがった……。ナルコレプシーだ。体に力が入らなくなっていく。

「そ、奏多！」

真羽が叫ぶ中テーブルに腕を置いて必死に体の姿勢を保とうとするが、わるあが悪足掻きもいいとこだ。言った矢先に最悪の事態が起こってしまったが、この状況ではむしろ幸運かもしれない。都合よく発症してくれて助かった。とにかく成瀬には悪いがあとで丁重に謝罪しておこう。

「どうしたの、日野君？」

さすがに様子がおかしいと思ったのか、僕を気遣う声を掛けてくれるが、それにちゃんと返答する余裕はもうない。

「ごめん……なる……せ。迷惑……か……け……」

最後まで言い切れずに僕はテーブルに突っ伏してしまう。そしてそのまますぐに意識も薄れていった。



目が覚めてから最初に気付いたのは、僕が見知らぬ部屋で寝ていたことだ。慌てて飛び起きると、察するにそこはマロン・アット・ユートピアの休憩室のようだった。でもいつもは意識が戻ると同時にそばにいる真羽が見当たらない。

とにかくあいつには訊きたいことがある。起きてから思い出したが、今回の悪夢は今までと少し違った。これまでは錯乱した僕に真羽が声を掛けてくれることで落ち着きを取り戻し覚醒していたが、そもそも今回はあいつが声を掛ける前に姿を見た瞬間、現実の記憶を取り戻し、覚醒することが出来たのだ。

休憩室のドアを開けるとカウンターの横に出た。そこには片付けをしている成瀬がいたが、真羽はそこにもいなかった。

「大丈夫、日野君？」

「あ……ご、ごめん！ すんごい迷惑掛けちゃったみたいで……」

僕は成瀬に迷惑を掛けてしまったことを思い出し、慌てて謝った。

「君の事情は知っているって言ったじゃない。気にしなくていいよ」

「でも……」

さすがにそれで済まず訳にはいかないのだから、僕は食い下がろうとする。すると成瀬がこんなことを言い出した。

「それよりも、君の幼馴染に声を掛けてあげたらどうだい？ いろいろ話したいことがあるんじゃないの？」

僕は確信した。成瀬には真羽のことが見えているのだと。

「あんた……真羽のことが見えるのか？」

「正直に言うとそうだね。でも今はそんなことより早く君の幼馴染と話してあげたら」

一体成瀬は何なんだ。真羽が見えるって……。でもちょっと待てよ、だったら真羽が言ったことも全部聞こえていたはずなのに、どうして聞こえない振りなんかしていたんだろう。しかし、そんなことより今は真羽だ。一体、あいつはどこにいたんだろうか……。

「真羽、どこにいるんだ？ 今はふざけている場合じゃないぞ」

もう成瀬には隠す必要もないので、僕は声に出して真羽を呼んだ。

「一体何を言っているんだい？ 君の幼馴染ならすぐ横にいるじゃないか」

「え？」

そう言われても、と思って横を見ると少しムツとした顔の真羽が本当にいたので、少し驚いてしまう。

「うお！ 真羽、今までどこにいたんだ」

「どこにって、ずっと奏多のそばにいたよ！」

いやいや……。真羽は「明らかに奏多の方がおかしい」とでも言いたげな顔をしているが、だったら僕もすぐ気付いたはずだ。

まあいい、そんなことより今はいろいろ訊きたいことがある。

話を整理させるために真羽を椅子に座らせ、僕もその向かいに座った。

「真羽、さっきの夢だけど、何でお前を見ただけで目を覚ますことが出来たんだ？」

「それは……私にもちゃんとした理由は解らないけど、多分奏多の症状が軽くなっているから、だと思う」

「軽くなっているって……」

つまり僕のナルコレプシーが回復に向かっているのか……。

「最近の奏多、本当にすごく楽しそうだもん。今までは私以外の誰といても楽しそうな表情を見せなかったのに、ナルナルの店に来るようになってから少しずつだけ明るい顔を見せてくれるようになったよ。だから気持ちに余裕が出来た分、夢の中でもある程度は冷静にいられたんじゃないかな」

そう、なのか……。確かにその理屈ならさっきの夢の出来事にも説明が付く。

今まで諦めていたが、僕としてはナルコレプシーが治ることは大歓迎だし、こんなコミュ障な自分を変えられるならぜひそうしたい。たとえそれがどれほど時間が掛かるとしても。それで真羽に負担を掛けなくて済むなら。

希望が見えたところで僕はカウンターで黙々と作業を進める成瀬に向かって、気になっているもう一つのことを切り出した。

「ところで成瀬、あんたは一体何者なんだ？」

単刀直入に訊く。誤魔化させはしないぞ。

「私はただ、君の幼馴染が見えるだけだよ」

成瀬は至って冷静に返答した。

「真羽はどう思う？」

今度は真羽に訊いてみる。

「ナルナルは……奏多のナルコレプシーについて何か知っているみたい。奏多がさっき発症した時もかなり手慣れた手つきで看病していたし……。あと、看病しながら私に向かって、『早く行ってあげて！』なんて言ったりもした……。慌てて奏多の夢に飛び込んだから詳しくは解らないけど、絶対何か隠しているよ！」

真羽にも解らないらしい。でも成瀬のことが気になるという真羽の言葉は正しかった。真羽が見えるどころか僕の夢に飛び込むことが出来ることまで知っているなんて……。絶対こいつには何かある。

僕の中で成瀬に対する不信感が一気に上昇する。今まで気さくに接してもらった上に今日は迷惑まで掛けてしまっただけでこう思うのも罰当たりかもしれないが、成瀬は相当食えない奴だ。これからはあまり近付かない方がいいかもしれない。

「本当にあんたは何者なんだ？ それに何を隠しているのか教えてくれないかな」

すると成瀬はどういう訳か今まで見せたことがないような哀しそうな顔を一瞬見せてからすぐにいつものスマイル顔に戻り、こう言った。

「確かに君の幼馴染に向かってあんなことを言ってしまったのはうかつ迂闊だったかもしれない。でも私だって隠したくて隠している訳じゃない。言えるものなら今すぐ全部話してしまいたいよ。ただ、私は君たちに対して悪意がある訳じゃない。むしろ助けたくて仕方ないんだ。心からそう思っているよ。これだけは解ってほしいな」

その言葉の真意が本当かどうかは解らないが、怪しさは増すばかりだ。僕はもうこれ以上訊いてもものりくらりいな躲されるだけだと思い、会計を済ませたあと「面倒を掛けてしまったことは本当に悪かった」とだけ言って店を出た。結局僕が訊いたことは誤魔化されてしまったけど……。



「おはよう、日野君」

次の日に登校して席に座るなり、成瀬が話しかけてきた。昨日あれほどのことがあったのに、どういう神経をしているんだろうか。成瀬から話しかけてきたとはいえ、近付かないでおこうという思いは早くも破られた。

「……おはよう」

邪険に追い返す訳にもいかないので挨拶はするが、だめだ、話が續かない。どうも周りに人がいると話しにくいな。しかもよく見ると他の奴らも、あの成瀬が何でわざわざ日野に話しかけているんだみたいな雰囲気になっているし。

あとそんな視線を向けさせまいと真羽が「ディーフェンス！」と言いながら体を張って壁を作ろうとしているけど、もう突っ込み切れん。

とにかくここは周りから不審がられないよう、平常を装っておくことにしよう。もっとも、今更僕がそんなことをしてもあまり意味ないだろうけど。

「いいのか、僕と話したらあんな視線を向けられるぞ」

「そんなこと気にする方が面倒くさいよ。今日は日野君にウチの新作ケーキを試食してもらおうと思ってさ。また店に来てくれないかな？ こんなことを頼めるのも……一応常連さんの日野君だけなんだし」

本当にこいつは食えない奴だ。成瀬のペースに乗せられると、難しく考えていることが馬鹿らしくなってくる。

でもそのおかげで冷静になれた。考えてみると成瀬は、本当はこれ以上ないくらいお人好しで、僕らの力になってくれるのではないかと思えてくる。でなければ僕の事情を承知の上でここまで親しく接してくれたり、店で看病したりしてくれるはずがない。真羽に向かってあんなことを言ったりするはずもないし。

それを考慮すると昨日の成瀬の言葉は本当かもしれない。そうすると一時的な感情で不信感を持ってしまった自分自身が恥ずかしくなってくる。

もういいや、別に成瀬が僕の体質を知っているからってそれ自体に得がある訳でもないし。それに変な視線を向けられるのも覚悟の上で話しかけてくれているんだし、もう疑うのはやめよう。これ以上は男がすた廃るってもんだ。あともう深く考えるのは面倒くさい。

「わかった、じゃあ放課後に行くよ。あと成瀬」

「何？」

次の言葉を言った瞬間、真羽がすごく驚いた表情をしていた。あとで訊いたら僕自身も驚いてしまった程に。

「『一応』は余計だ」

その時の僕の表情は、今まで見たことがなかったくらい笑っていたらしい。真羽が死んで以来、ナルコレプシーが発症する程暗い生活を送ってきた僕がだ。清々したっていうのもあるだろうけど、真羽が言っていた通り憑き物が落ちたようにすっきりした気分だった。

「ふふっ、ごめんね」

こんなやり取りをしておいて噂が立たない訳がない。後日真羽が「成瀬があの日野に弱みを握られて脅されている」というとんでもない話を持ってきましたとさ。



あの教室でのやり取り以来、僕ら三人は今まで以上によく付き合うようになった。真羽も僕に笑顔を取り戻させてくれたからなのか、成瀬に信頼を寄せているようだ。それどころか真羽と成瀬は気が合うらしく、ガールズトークで盛り上がりたりするなど、僕を差し置いて一緒にいろいろなことをするようになった。それはまるで大変仲のよらしい姉妹の様に見える。

僕たちの仲についてはこれぐらいにして、ナルコレプシーに変化が起こったことを語らないといけないだろう。

成瀬の店での発症以降、僕のナルコレプシーは真羽が言った通り回復に向かっていた。とりわけ変化したことは二つある。

一つ目は夢の中で真羽の姿を見るまでもなく、最初から現実の記憶を持っていることだ。だから最初から取り乱すことなく冷静でいられるし、店の時と同様に真羽を見ただけで覚醒出来るようになったのだが、驚くべきことに何回かはそれすらなしで意識を取り戻すことが出来たのだ。

僕の担当医は回復の兆しを不思議がりながらも喜んでくれた。でも、僕としては二つ目の変化のせいで一概に喜べないのだ。

その二つ目の変化とは、夢から覚めてからしばらくの間真羽が見えなくなることだ。成瀬の店で初めてこうなった時は気付かなかったけど、どうやら覚醒すると必ずこの状況になるらしい。しかも回復に向かうにつれて見えなくなる時間も長くなっていくのだ。

ただ、これについては確信していることがある。

このままナルコレプシーが完治すると、真羽のことが見えなくなってしまう。

そうなればナルコレプシーは完治しても、また真羽を失うというショックを味わうことになる。

もう真羽を失いたくない。でも一体どうすれば……。

まだ完全に真羽なしで覚醒出来る訳ではないため、あいつは夢に介入し続けてくれていたが、いずれその必要もなくなるだろう。そうなれば見えなくなるのも時間の問題だ。

完治して真羽の負担を減らしたい気持ちと消えてほしくない気持ち、矛盾する思いの間で苦悩を強いられる。そして真羽が見える状態を保ったままナルコレプシーを治す方法を模索したが、結局そんな都合のいい方法は見つけれずに、時間はどんどん経過していった。

それにつれ真羽が見えなくなる時間も少しずつ長くなっている。僕はそこから来る焦りと真羽を再び失うかもしれないという懸念から、真羽や成瀬には気丈に振る舞っているものの、内心では深く悩み込むようになってしまった。

そんな状態のまま完治も目前に迫ったある日のことだった。

唐突に真羽がものすごく不満そうな顔をしながら真羽が話しかけてきた。

「奏多、早くナルナルの店に行こ」

「え、ちょっと待ってくれ。今日は家に帰って——」

「は・や・く・い・く・わ・よ！」

「は、はい」

僕が言い切らないうちに怒気のコも籠った声で言うものだから怖気づいてしまった。何をそんなに怒っているんですか真羽さん。

もしかして、ナルコレプシーのことで悩んでいることについてだろうか。

とにかくこれ以上余計なことを言うと刺激するだけだろうと思い、大人しく向かった。

「奏多、いつまでそうやってウジウジしているつもりなの！いい加減にして！確かに会えなくなっちゃうのは私も寂しいよ。でも私は奏多に笑顔でいてほしいの！私がいなくなっても元気でいられるように……。私なら覚悟は出来ている。だから奏多も怖がらないで」

席に着くなり真羽が声を荒げてこう言った。

ああ、やっぱりそのことか。長い付き合いがある真羽には内心悩んでいることはお見通しだったか……。

でも僕だってずっと悩んでいる。ここは遠慮なく言い返させてもらう。

「……怖がらずにいられるものかよ。家族の様に育ってきた幼馴染を二度も失ってしまうかもしれないんだぞ！」

「じゃあこのまま一生塞ぎ込んでいるつもり？ この意気地なし！ ビシッと覚悟決めなさいよ！」

「お前に何が解る！ 僕は——」

「日野君」

今まで黙っていた成瀬が突然僕の言葉に割って入った。僕は少し気が立っていたので、割り込んだ成瀬に文句を言ってやろうと顔を向けた。

でも僕は何も言えなかった。いつも笑顔を絶やさない成瀬が、真剣な顔をしていたからだ。

「日野君、君の幼馴染がどうして幽霊になってまで君の前に現れて、わざわざ悪夢の辛苦を軽減してくれているか解る？」

「それは……」

そのことについては、僕はずっと疑問に感じている。未だに本当の理由は解らないままだ。

「ナルナル、知っているの……？ やめて！ 言わないで……」

「いいや言わせてもらう。そうしないとそれこそ一生塞ぎ込んでしまうだろう。ある或いはもっと最悪なことになるかもしれない。私はそんな日野君を見たくないし、付き合いをいともなく断りたい。だからはっきり言わせてもらう。君の幼馴染がそこまでしてくれているのは、彼女が責任を感じているからだよ」

「何だって……」

「もともと君がナルコレプシーを発症したきっかけは、彼女が死んでしまったことによるショックのせいだ。だからそのことに責任を感じて幽霊となってまで君の病気を少しでも治すことに尽くしてくれているんだよ。その身を犠牲にしてまでね。だから完治して君の前から消えてしまうことも厭わないんだ。彼女だって相当辛いはずなのに」

「そんな……」

まさかそんな理由だったなんて……。

真羽の方を見るとうっすらと涙を浮かべていた。

そうまでして思ってくれていたのに、僕は何て情けないことを……。

その事実を知るや否や僕は激しく後悔した。僕が悩んできたことは真羽の好意と覚悟を踏みにじるものだ。

「真羽……」

「奏多……！」

真羽はとうとう堪え切れずに泣いてしまった。僕の方もジンとする感覚のあとに涙があふ溢れてくる。

真羽を思い切り抱きしめたいが、あいにく生憎それは叶わない。

「そこまですることないのに……。お前の責任じゃないのに、何背負っているんだよ……馬鹿野郎……！」

「だって、私がいないと奏多は……」

「でも……ありがとう」

触れられないことは解っている。でもそんなことには構わず、真羽の頬に伝わる涙を指で何度も拭おうとする。その度に指は虚しく空を切る。

「さて日野君、水を差してしまって悪いけど、気持ちの整理は出来たかな。結局君はこのまま彼女の好意を無駄にするのか、覚悟を決めて完治させるか、どちらを選ぶのかな？」

成瀬さん、せめてもう少し間を置いてくれませんか？

でもおかげで僕にも覚悟は出来た。

「そんなこと言うまでもない。真羽、今まで……本当にありがとう」
だめだ、これ以上抑え切れない。僕も涙腺が崩壊したかのように多量の涙を流した。

「もう、奏多泣き過ぎ」

「お前こそな」

そして真羽と僕は約束した。

別れの時はお互い笑顔でいよう、と。



何度も夢の中で訪れたこの病室とも今日でお別れか……。直感的に解る。これが最後の発症だ。

今回も成瀬の店で発症したが、今回もそうなってしまった。起きたら今までのことも含めて何か礼をしないとな。

「お待たせ、奏多」

そうこう考えているうちに真羽が現れた。

真羽の顔からしっかりとした覚悟が改めて伝わってくる。

「何か、最後に話す？」

「そう言われても、何話していいか解らないな」

「ふふっ、そうね」

約束通り互いに笑顔を浮かべているが、やばい、一瞬でも油断してしまうと涙が溢れかねない……。それでは約束を破ることになってしまう。

「じゃあ……私、行くね」

「ああ、こういうのは潔くしないとかえ却って辛くなる」

笑顔を浮かべるんだ。笑顔を……。

「じゃあね……バイバイ！」

真羽の声はハキハキしているが、顔は……。おいおい、それじゃ約束破りだよ真羽さん。まあでも、それでも一生懸命笑顔を作っているからいいか。そういう僕も人のこと言えないくらい泣いてしまっているし。

そして真羽の体はどんどん薄れていき、やがて完全に見えなくなった。



「おかえり」

意識を取り戻すと同時に成瀬が声を掛けてくれながら、ココアを出してくれた。

「どうだった？」

そう訊かれても、あっさりし過ぎてあまり話すことはない。

「別れの挨拶だけで終わったよ。でもやっぱり最後はお互い泣いてしまってさ……。それでも一生懸命笑顔を作って……」

だめだ、またしても涙が流れてくる。でももう別れたあとだから思い切り泣かせてほしい。

「さあ、ナルコレプシーも治ったことだし、これからは真羽のことを胸にしまわないとな。それであいつの分までしっかり生きていかないと……」

上を向いて笑っていようとすが、涙が一滴、また一滴と頬を伝って床に落ちていく。

「だめだなこんなんじゃ……。真羽が見たら怒るだろうな」

「そうだね、彼女ならきっと『本当よまったく。やっぱり奏多には私が付いていないとだめだね』と言うよ」

「はは、真羽そっくりだよ」

でも一つ成瀬にも訊きたいことがある。今なら多分教えてくれるだろう。そう、成瀬は一体何者なのか、だ。

「なあ成瀬、もうあんたが何者なのか教えてくれてもいいじゃないか？ どうして僕のナルコレプシーを詳しく知っていたのか、何で真羽が見えたのか」

つと」

「何とも強引なこじつけだが、本人にも解らないのであれば仕方ない。

「じゃあ何で最初に真羽だと言ってくれなかったんだ？」

「だって、奏多のナルコレプシーを治すには他人として接して、心に余裕を持たせる必要があったから……。バラしちゃうと結局真羽と接していることになるから意味がないでしょ。それに奏多には私以外の人の付き合い方も覚えてもらわないと、と思ってね。」

つまり敢えて第三者の振りをして接することによって、治療の糸口を作ったということか。

「それだったら何で発症した時に真羽が見えることを白状したんだ？」

「いやあ、あれは単純に私が迂闊だったわ。全部話してしまいたくて仕方ないって気持ちを抑え切れずに、うっかり口を滑らせちゃった。それにそのことを否定したところで余計怪しんだでしょ？ あの時内心すごく焦ったよ。でも結果的に私のことを全面的に信頼してくれることに繋がったし、今ではよかったと思うけどね」

そりゃそのタイミングで必死こいて否定するなんざ、自ら疑ってくださいと言っているようなものだしな。

でもあんな笑顔で内心焦っていたなんて……。全く見破れなかった。あ、でも今思い出すと全部話せるならそうしたいとか言っていたし、あながち嘘ではないのだろう。

「でも少なくとも、僕に幼馴染の話させる必要はなかっただろ！」

そうだ、この店で初めて発症する前に話していた内容。あれは絶対要らなかっただろ！

「え～、あれは単純にからかっただけよ」

そろそろワンパンいいですか？

「しかしよくあそこまで他人になりきれたな。全く気付かなかったぞ」

「だって奏多とは長い付き合いだもん。大体どうすればいいか解るわよ。自分のことは自分が一番よく知っているからね。でも表情とか口調まで変えるのは本当大変だったよ。それでも『私』は騙し切れなかったみたいだけだね」

そういや真羽の奴、ナルナルのことが気になるとか言っていたっけな。あいつの直観は正しかったのか。

しかし、あれほど辛い思いをして別れた真羽とこうしてすぐに再会出来ることになるとは誰が予想出来ただろう。

もしかしたらまだ夢から覚めていないのだろうか……。いや違う。こんないい夢が悪夢だけのナルコレプシーで見られるはずがない。

そうか……。真羽は幽霊だった時だけじゃなく、生まれ変わってまで辛い思いをしていたのか……。それに気付かなかったなんて、僕は本当に馬鹿だ。

「真羽……本当は言いたかったんだよな……。正体を明かしたい気持ちでいっぱいだったはずなのに、僕のためにずっと我慢していたんだよな……。もうお前はどこにも行かないよな」

ここまで想ってくれている幼馴染がいるなんて、僕は本当に幸せな男なんだろう。

「うん！ うん！ これからはずっと一緒だよ！」

前は触れ合うことさえもままならなかったが、もうそんなことはない。僕らは今まで出来なかった分を取り戻すかのように思い切り抱きしめ合った。

このごきまでもお人好しい幼馴染は幽霊どころか生まれ変わってまで僕のナルコレプシーを治そうと努めてくれた。今度は僕がそれに応えなければならぬ。

ただ、もう少しくらいこの時間を満喫させていただきたい。

僕は改めて真羽を抱きしめながら言った。

「おかえり真羽」

「うん！ ただいま！」

[戻る](#)